京人

—きょうと—

古材にこだわる木の伝道師

「丸嘉」社長 小畑隆正さん(44)

案内された倉庫には、見るからに時代がかった渋みのある柱や梁、京町家の戸障子や地板などが大切に保管されていた。解体される古民家から買い取り、家具や調度品として再利用する事業に取り組んでいる。

「思いの詰まった貴重な木材を家主の気持ちごと買わせてもうてます」

安政6（1859）年から続く材木卸商。いま商品として扱う木材は、丸太ごと切り出した上質の無垢材と、戦前に建てられた古民家などから取り出す古材だけ。丸太と木の香りに包まれて育った5代目は、木をこよなく愛し、「木の伝道師」を自任している。

□　□　□

天然木のフローリングと古材の専門店として、こだわりの木材を使った家や店舗の設計、施工を手がけている。以前は住宅建材全般を取引していたが、今は合板のフローリングでさえ扱っていない。「うまいカレー専門店には全国から客が集まる。〝選択と集中〟ですわ」と笑う。

きっかけは、インターネットが急速に広まった平成12年。自社のホームページを立ち上げると、全国から無垢材への問い合わせが相次いだ。思わぬ反響に手応えを感じ、代表に就いた17年に思い切って無垢材専門に事業を転換した。

「それまでは顧客の工務店や大工ばかり意識していて、実際に家に住む人のことが見えていなかった」と振り返る。

「もっとおもろい表情の木はないか」と海外を飛び回るうち、米・シアトルのカフェで出くわしたのが古材だった。欧米ではカフェ文化が根付き、内装に古材がふんだんに使われていた。「シルバーグレーに色あせたむき出しの梁がめちゃめちゃクールやった」

折しも京都市内では京町家が次々と解体されるのを目にしていた。「捨ててしまうのはもったいない。古い木を古材として再生すればまだまだ使えるはず」と思いついたという。

□　□　□

近年、所有者らの高齢化に伴い、相続や老朽化を理由に取り壊される町家が増加。京都市の調査によると、市内約4万7千戸の町家のうち1割以上の約5千戸が空き家で、町家は年に約2%ずつ減少している。

古材を再利用するためには、家の解体に専門の業者を呼んで慎重に取り出さなければならないが、そんな苦労は意に介さない。

「森で100年、民家で100年。木にはもう100年頑張ってもらいます」

家主から古材を買い受けるときは、家の歴史も聞くよう心がけている。手放すことに罪悪感を抱くオーナーも多く、「大黒柱だけでも使うてもろたら先祖へのはなむけになる」と喜んでもらえるそうだ。

□　□　□

京町家を改装して国産材のショールーム「京町家サロン　木想倶楽部」を21年に開設。昨年は、京都商工会議所が実施したコンテストで、古材を家具やキッチンに再生する事業が「知恵ビジネスプラン」として認定された。今夏には古材のショールームもオープンする計画だ。

「もともと日本は木の文化の国。木には人と人との関係を和らげる力もある。木のある空間を演出し、お客さんに『木を使ってよかった』と言ってもらえるのが最高のごちそうです」と目を細める。木材の本当の良さを伝えるのは「使命」だという。

（吉国在）

おばた・たかまさ　昭和45年、京都市伏見区生まれ。平成5年、関西外国語大英米語学科卒。大手住宅メーカーを経て8年丸嘉入社。12年専務、17年代表取締役社長に就任。老舗材木卸商として、マツやクリ、メープルなど50樹種300種類に及ぶ内外の木材を使ったフローリングを販売するほか、古民家から買い取った古材を再利用する事業を展開している。問い合わせは丸嘉（☎075・622・1408）。